

大阪

023

H

令和7年度

総合型選抜

小論文問題

〔注意〕

1. 問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
2. 問題冊子は、表紙を除き、1ページから12ページまでである。脱落している場合は、直ちに申し出ること。
3. 解答用紙は4枚ある。問題に対応する解答用紙が揃っていることを確認すること。
4. 解答用紙をミシン目に従って切り離し、**受験番号を各解答用紙の受験番号欄(計8か所)に正確に記入すること。**
5. 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。なお、句読点などの記号は1字分とし、アルファベットおよびアラビア数字は2文字を1字分とする。
6. 問題冊子の下書き用紙のほか、問題冊子の余白も下書きに使用してよい。
7. 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
8. 問題冊子は持ち帰ること。

問題 1 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

現代社会に見られる多くの能力論議は、これからの時代に必要な「新しい能力」を先取りし、それを今後求めていこうとする言説の集まりである。実のところ私は、新しい時代にコミュニケーション能力や協調性、問題解決能力などといった「新しい能力」といわれるものがこれまで以上に必要とされている、とはあまり思っていない。誤解を与えそうなので急いで補足しておくが、現代においてこれらの能力が不必要であるといっているのではない。ただ、それらはこれまでも求められていたし、これからも求められるであろう陳腐な能力であって、新しい時代になったからはじめて必要ないし重要になってきた能力などでは決してない、ということなのである。理由は後述するが、ここでは私のスタンスだけあらかじめ明確にしておく。むしろ私の考えはこうだ。

いま人々が渴望しているのは、「新しい能力を求めなければならない」という議論それ自体である。

こうした前提に立った場合に世の中の見方が変わってくるのではないか、というのが本書でこれから繰り返し論じていく主張である。

〈略〉

ではそうした見方が妥当だとすると、なぜこのような渴望が生み出されるのだろうか。その答えを導き出すために私が用意しているロジックは次の5つの命題からなる。

命題1 いかなる抽象的能力も、厳密には測定することができない

命題2 地位達成や教育選抜において問題化する能力は社会的に構成される

命題3 メリトクラシー^(注)は反省的に常に問い直され、批判される性質をはじめから持っている(メリトクラシーの再帰性)

命題4 後期近代ではメリトクラシーの再帰性はこれまで以上に高まる

命題5 現代社会における「新しい能力」をめぐる論議は、メリトクラシーの再帰性の高まりを示す現象である

命題1「いかなる抽象的能力も、厳密には測定することができない」は、能力という言葉がもつ抽象度の高さと深く関わる。私たちは近代社会以降、能力を唯一許容できる地位配分原理として採用し、それをいかにして実行していくかということに腐心してきた。しかし、能力というものは、なにか具体的に私たちの目の前に形としてあるものではない。個人に内在する目に見えない何物かなのである。

具体的な能力、例えば、「100メートルを9秒台で走る能力」であれば、実際に100メートル走ってみて9秒台で走れるかどうかで、その能力の有無について白黒をはっきりつけることができる。つまり、その能力の定義のなかにその能力の具体的な測定の仕方を含んでいる場合のみ、私たちは能力の有無をかなり明確に判断できる。

しかし、私たちが社会生活の中で問題視するのは、そのような個別具体的な能力ではない。なぜなら、そうした具体的過ぎる能力では、応用範囲が狭すぎて社会的有用性がかぎられるからである。だから、われわれは、社会的に広く求められる能力を議論する場合、それよりもずっと抽象度の高い能力を問題にする。「頭の良さ」「運動神経」「学力」「コミュニケーション能力」「コンピテンシー」などである。そしてそのような抽象度を持った能力を扱う場合には、能力そのものの正確な測定はほぼ不可能であり、能力の代理指標の測定で妥協するしかない。どれほどの統計的・科学的道具をもってしても、このような抽象的な能力を直接測ることはきわめて困難なのである。

命題2「地位達成や教育選抜において問題化する能力は社会的に構成される」というのは、私の専門分野である教育社会学で「能力の社会的構成説」として有名な議論の応用である。

命題1で示したように、抽象的能力はそのまま直接的に測ることができないが、その場合でも、私たちの社会では何らかの形で「能力があるかどうか」の判断を下さなければならない。なぜならば、近代社会は、能力主義的であるべきだというタテマエを崩せない社会だからである。そのためには、何らかの形で「能力」を割り切って定義づけ、測定した形にしなければならない。すなわち、私たちは、とりあえずの暫定的な能力基準を使って社会を回していつている面がある

のだ。そこにはなんらかの恣意的な判断の入る余地が多分にある。場合によっては、ある選抜や地位配分の局面において、能力に基づいて選抜した形にはなっていない、実際には選抜されたという結果をもって「能力あり」の判断をあとづける面すらあるのである。これにより、能力評価にはさらなる揺らぎと不安定さが付け加わることになる。

命題1と命題2は公理のようなものである。おおむね文脈を問わず一般的に成り立つ論理である。そして、この二つの命題を受け入れるならば、命題3はロジカルに導き出される。

命題1から能力の正確な測定が困難であることを前提とすれば、現実に作動しているかに見える能力主義の理念や基準は確定的なものではなく、むしろ暫定的なものとしてしか存在しえない。そして、暫定的であるがゆえに、どのような形で理念と現実の折り合いをつけるのかということはどこかで決定せざるをえない。そしてその決定は、能力主義に内在的な論理からは決まらない以上、能力主義の外側の環境、すなわち社会的文脈に委ねられることになる。つまり、能力判断基準の決定はとりあえず社会が行なうのである。これが命題2の能力の社会構成的性格である。

もし、このように文脈依存的にかつ暫定的な形でしかメリトクラシー社会を運用できないのであれば、そこには潜在的につねに「そうではなくても良かった可能性」を内在させていることになる。つまり、命題1と命題2を受け入れるならば、メリトクラシーには、常に反省的に問い直され、批判される性質がはじめから組み込まれていることになる。これを筆者は「メリトクラシーの再帰性」と呼んできた。

命題4は、命題3に一定のある条件が加わった場合として、つまり命題3の特殊ケースとして成り立つという関係にある。一定の条件とは、後期近代社会という時代条件である。メリトクラシーの再帰性はいつでも作動しているが、その程度は時代状況によってことなる。近代社会においては、能力主義の暫定的指標として学歴が使われてきたが、教育が普及し、高学歴化が進展した後期近代においては、学歴という能力指標そのものの信頼性が揺らぎ、再帰的まなざしをこれまで以上に向けられることになる。これが命題4の含意である。

そして、命題4を受け入れるならば、命題5は現代社会の解釈として容易に導き出される。これまで説得的に示されてきた学歴という能力指標の信頼性が揺らぐ中で、人々は不安心理に掻き立てられ(能力不安)、「新しい能力」をめぐる議論を活発化させる。これがメリトクラシーの再帰性の高まりを示す現象である。

(中村高康『暴走する能力主義－教育と現代社会の病理』筑摩書房、2018年より抜粋。掲載にあたり、一部省略・改訂した箇所がある。)

(注)メリトクラシー：いわゆる能力主義、業績主義。個人の能力や業績によって地位達成が決定される体制。

問1 本文では、下線部「そうではなくても良かった可能性」という表現を用いることで、メリトクラシー社会にはどのような批判される性質があると論じられているか。本文に即した表現を用いて200字以内で説明しなさい。

問2 「現代の教育においては、これまでの教育では注目されてこなかった〇〇力を身につけさせることが求められています」という主張のもとに、「〇〇力」という「新しい能力」を身につけるための教育改革を推進しようとする議論はしばしばみられるが、こうした議論はどのような批判的視点をもって読み取る必要があるだろうか。「〇〇力」として、具体的な能力を例示しつつ、本文の議論を踏まえて400字以内で論じなさい。例示する能力は本文中で挙げられているものに限らなくてもよい。

問題2 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「人新世」(アンソロポシーン：Anthropocene)とは、現在形成されつつある地層が人類という生物種の活動による地球環境の変化によって「完新世」とは異なる地層となりつつあり、人類の活動の痕跡が地層に永続的に残ることが予測されるという地質学的事実を根拠に、私たちが生きている現在を指す地質年代として提唱されている地質学的な概念である。2000年に大気化学者のポール・クルツェンと生物学者のユージン・ストーマーによって地球圏・生物圏国際協同研究計画の *Global Change News Letter* 誌で提唱された。完新世から人新世への移行がいつなのかを含め、この概念の内実と妥当性については、現在、国際地質科学連合の国際層序委員会に設置された人新世作業部会で検討されており、この概念が地質年代として公的に採用されるかどうかは、地質学界での議論に基づいて今後決められてゆくことになる。

このように地質年代として未だ公認されてはいないものの、また、厳密には地質学の概念であるにもかかわらず、この概念については、人類の活動によって引き起こされる惑星規模の急激な環境変動など、現在人類が直面している問題を浮き彫りにするキーワードとして、地理学や環境科学をはじめとする自然科学ではもちろん、人文・社会科学でも幅広く議論されている。とくに人文・社会科学では、この概念への批判を含め、「人間」や「人類」をはじめ、「自然／人間(社会・文化)」の二元論を再考して再編成する議論が盛んに展開されている。また、「人新世」は欧米で広く一般に普及し、芸術運動でも重要なトピックとして取り上げられるのみならず、野生生物管理、環境開発、科学技術など、グローバルなレベルからローカルなレベルにいたる多様な政治・経済の現場に大きな影響を与えつつある。

「人新世」がこのように大きな影響力をもっているのは、人類の活動と地球の活動のもつれ合いが地球での人類の生存可能性を近い未来に脅かす可能性を指摘し、現在の人類の持続不可能な活動に対して警鐘を鳴らす概念でもあるからである。人工的に生み出された大量の汚染物質の地球環境への拡散と蔓延、地球温暖化をはじめとする急激な気候変動、6度目の大量絶滅とまで言われる生物多様性

の急速な激滅、思いもよらぬ病原体によるパンデミック、壊滅的な被害をもたらす原子力災害など、人類と地球の活動のもつれ合いによって引き起こされている現象を考えると、人類が営んでいる政治・経済・社会・文化のあらゆる側面を見直し、現在とは異なる世界を築かねば、人類の活動によって人類自身が絶滅する可能性すらある。この概念が人類の生存可能性を脅かす「惑星規模の限界値」(プラネタリー・バウンダリーズ)と関係づけられて語られることが多いのも、こうした切迫した問題に注意を喚起するためである。

こうした「人新世」という概念の特徴は、グローバリゼーションという概念と比較するとさらに鮮明になる。たしかに、どちらにおいても、地球という惑星が全体としてとらえられている。しかし、球(グローブ)として表象される地球が不変な舞台として想像され、科学技術と国民国家体制と産業資本制の複合的なネットワークがその球を覆い尽くしてゆくというグローバリゼーションのイメージに対して、人新世では地球という惑星はもはや不変の舞台ではない。地球は人類という生物種の活動と連動しながら変動する変数と化している。人類の活動は地球という惑星に思わぬ影響を与え、その結果として生じる地球の営みの変化の影響が思わぬかたちで人類に跳ね返ってくる。しかも、温暖化をはじめとする地球環境変動や思わぬ病原体によるパンデミックなどに端的にあらわれているように、こうした人類と地球の活動のもつれ合いは人類の制御と管理を超えてしまっており、人類の生存を脅かす可能性すらある。

こうした認識が広く浸透し、「人新世」時代とも呼ぶことができる今日の時代状況にあっては、地球それ自体をはじめ、地球に棲まう多様な生命体、さらには無機質な物質たちであっても、近代の支配と管理には収まることなく、そこから溢れ出してしまう過剰な他者として立ちあらわれ、グローバル・ネットワークを建設して拡張してゆく近代のプロジェクトには限界があることを教えている。

これまでグローバル・ネットワークを建設して拡張してきた近代のプロジェクトは、ラトウールをはじめとする科学人類学者が明らかにしてきたように、「自然／人間(社会・文化)」の二元論的な秩序に従う「一つの世界だけからなる世界」の実現を目指してきた。そこでは、人間以外の生命体や無機質な物質、つまり非人間だけからなる「自然」と、人間だけからなる「社会」に世界全体が分割され、自

然の非人間(人間以外の存在)は自然法則の秩序に従い、社会の人間は理性の秩序に基づいて制定される法に従うと仮定される。そのうえで、「科学」の実践を通して自然の普遍的な真理を自然法則として明らかにし、その法則を活用することで自然の非人間を制御して管理することが目指される。また、それと同時に、理性に基づく「政治」の実践を通して国民国家などの社会の法を制定し、その法によって人間を支配して統治・管理することが目指される。この理想的な世界を「一つの世界だけからなる世界」として、つまり唯一の真に実在する世界として実現するために、近代のプロジェクトが「進歩」の名のもとに、自然法則と社会の法によって人間と人間以外の存在を動員することで建設して拡張してきたのがグローバル・ネットワークであり、そのネットワークは次のようなからくりで加速度的に膨張してきた。

まず、そこでは、「自然」と「人間」という二つの領域がそれぞれ「自然の真理」と「人間の理性」という別々の秩序に従っており、それらの相互作用がそれぞれの秩序に影響を与えることはないとされているため、自然の秩序と社会の秩序に従ってさえいけば、どんなやり方であっても自由に人間と人間以外の存在を結びつけてグローバル・ネットワークを建設することが可能になる。しかも、そうして構築されるネットワークが拡張し、より多くの人間と人間以外の存在を動員することが可能になればそれだけ、実験室をはじめとする科学技術の施設は拡充されてゆくため、その施設を通して自然法則がますます開示されてゆく。そして、そうして明らかになった自然法則を技術的に応用すれば、新たな機械装置や通信・交通網を開発し、さらに一層ネットワークを拡張してゆくことができ、そうして拡充されたネットワークによって自然法則がさらに明らかになり、その自然法則を応用すれば……という具合に、人間と人間以外の存在のハイブリッドなネットワークの拡張は加速されてゆく。しかも、この過程で、拡張してゆくネットワークを通してますます便利になってゆく物流や情報の流れによって、人間は伝統や共同体などの文化の束縛から解放されて自由で理性的な政治主体になり、そうした自律的な個人の合理的な政治の実践を通して制定される社会の法のもとで、人間はますます理性的に統治・管理されるようになってゆく。

(大村敬一・中空萌『フィールドワークと民族誌』放送大学教育振興会，2024年より抜粋。掲載にあたり，一部省略・改訂した箇所がある。)

問 1 「人新世」とは何であり，どのような影響力をもつのか，本文に即して120字以内で説明しなさい。

問 2 グローバル・ネットワークと「人新世」の関係について，本文に即して160字以内で説明しなさい。

問 3 「人新世」と呼ばれる時代にあつて，学際性・国際性・実践性を掲げる人間科学部においてどのようなことを学びたいと考えますか。160字以内で述べなさい。

